2025 年2月 16 日 降誕節第 8 主日礼拝メッセージ

「心の貧しい人とは」　　水谷憲牧師

聖書 マタイによる福音書 5章 1－12節

「私たちの社会は、物質的な豊かさに反比例して心の豊かさが失われつつある、心が貧しくなっている」と言われるようになって久しい。私はもう 50 歳超えてますけど、それこそ私が小学校くらいの頃からずーっと同じことが言われているような気がします。確かに、世の中を見回しても、今も昔も毎日見聞きするのは、しょーもない小者たちがやらかしている情けない犯罪の知らせばかりですよ。性犯罪、詐欺、恐喝、殺人、いじめにヘイトクライム…。他人に対する自然な想像力さえ働かすことのできない、心の貧しい奴らですよ。自分の欲求を満たすことしか考えられず、小さなことに目くじらを立て、平気で人を傷つけ、踏みつける。相手の気持ちや未来なんて考えたこともない。そんな出来事は、いちいち具体的な例を挙げなくても、皆さんもいくらでも思い浮かべることができるのではないでしょうか。そして、そんな世の中の現実について、苦々しく吐き捨てるこの自分も、偉そうには言っていますけれども、心の貧しさ、しょーもなさでは大差ない、目くそが鼻くそを笑うとるようなものであることも、同時に思わされて首をうなだれざるを得ないわけです。

「脳内メーカー」というアプリと言いますか、インターネットで検索するとすぐに出てくるものですが、もうずいぶん前に少しはやったものなのですが、自分の名前を入れてポチっとボタンを押すと、自分の頭の中、脳みその中がどんなことで占められているか、文字で表現されるというものです。私久しぶりにやってみました。ポチっとボタンを押すと、脳みその前半分は「恋・恋・恋…」後ろ半分は「待・待・待…」なんでやねんと。別の「脳内メーカー」を出して、ポチっとすると前半分が「食・食…」後ろ半分が「愛・愛…」頭の半分は食べることかいと。名字と名前の間にスペースを入れてポチっとすると頭の中全部が「金・金・金…」ちょっと待てと。わし牧師やのに。まあ、お遊びのようなものですから、本気にする必要はないのですが、だんだん笑えなくなってきたのでやめておきました。でも結局私たちの頭の中、心の中なんて、そんなものなんだということです。

さて、本日の聖書は、有名な「山上の説教」と呼ばれるものの冒頭の部分です。この箇所については、ルカによる福音書にも同様の記述がありますけれども、細かい部分においては多少のずれが見られるわけです。例えば今日のこのマタイ福音書においては、これはイエス様が山に登って腰を下ろして語られたものだと書かれているのに対して、ルカ福音書においては、山から降りて、平らな所に立って話されたものであるとされています。また、マタイ福音書においては「心の貧しい人々は幸いである」を始めとして、今日の箇所に挙げられているような「悲しむ人々」「柔和な人々」「義に飢え渇く人々」「憐れみ深い人々」「心の清い人々」

「平和を実現する人々」「義のために迫害される人々」そして「キリストのために罵られ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられる人々」といった、合計9つについて、「あなたたちは幸いだよ」と話されているのに対して、ルカ福音書においては「貧しい人々」「今飢えている人々」「今泣いている人々」「人々に憎まれ、追い出され、罵られ、汚名を着せられる人々」は幸いであるという4つの「幸い」と共に、「富んでいるあなた方」「今満腹している人々」「今笑っている人々」「すべての人にほめられる人々」は不幸であるという4つの「不幸」についても言及されているわけです。

そして、今日改めて皆さんと一緒に考えたいと思っているところは、3節の「心の貧しい人々は、幸いである」という箇所です。ルカ福音書においては、「心の」という部分がなく「貧しい人々は、幸いである」とだけ書かれていて、そのあとに「しかし、富んでいるあなた方は不幸である」とも書かれていることから、このルカ福音書で言われている貧しさとは文字通り経済的なものであったのだろう、これは「経済的に貧しい人々は幸いなのだ」というイエス様のメッセージなのだと読むことができるわけです。それに対してマタイ福音書では「心の貧しい人々は幸いである」とされています。聖書学者によると、イエスはもともと「貧しい人」としか言っていなかったのに、マタイがわざわざ「心の」という言葉を付け加えて、精神的な意味を深めた表現にしているのだと言われています。言われてみれば確かに、ここでは「泣いている人々」ではなく「悲しむ人々」とか「飢えている人々」ではなく「義に飢え渇く人々」、他にも「柔和な」「憐れみ深い」「心の清い」など、心のあり方についていろいろと書かれています。では、今日のこのイエス様のメッセージを心の問題として考えた時に、「心の貧しい人々」が幸いだとはどういう意味なのでしょうか。

「心の貧しい人」とは、確かに聖書の特殊な表現の仕方であるわけですが、私たちの自然な感覚では、それは想像力に乏しいとか、みみっちいとか、意地汚い、自分勝手で、人の不幸を喜び、幸せをねたみ、人を蔑み、傷つけ、差別して平気でいるような、そんな情けない性根の人のことを言うのではないでしょうか。私たちがふだん使う日本語では、「心の貧しい人」といえばそのような意味になりますが、今日のこの箇所は、そのような心を持った人が幸いだ、天の国はそのような「心の貧しい人」のものだということを言っているのでしょうか。確かに、「心の貧しい」の反対は「心が豊か」だと言えますし、もしも天の国が心の豊かな者だけのためにあるのであれば、私たちのほとんどは天の国に招かれる希望なんてなくなってしまうでしょう。「丈夫な人に医者は要らない」（マタイ 9:12）というイエス様のメッセージからしても、弱い人間こそが神様に目を留められ、罪人こそが天の国に招かれるはずであるわけです。そう考えるとやはり、先ほど言ったような心の寂しい、性根の腐ったような者が幸いだとイエス様は言っておられるのか。でも、そのような

心を持った人が幸いで、天の国がそんな「心の貧しい奴ら」のものだとするなら、こんなに救いのない話はない。別に完全な人間ではないけれども、でも一生懸命生きようとしている、そういう正直者はいつまで経ってもバカを見続けないといけないのか。

しかし、よく考えると、例えばぐでんぐでんに酔っ払っている者に限って「自分は酔ってなんかいない」と本気で言い張るように、本当に心の貧しい者は、「自分の心が貧しい」なんてことはこれっぽっちも思っていないのではないか。このイエス様の言葉を聞いたとしても、自分のことを言われているなどとは思わないのではないか。それでは全く意味がないではないか。やはりイエス様は「心の貧しい人々は幸いである」などとは実際には言ってはおられなかったのではないか。今日の箇所は、イエス様の伝説にマタイが勝手に手を加えて精神的な意味をこめたものでしかなかったのか。しかし、私はもしかするとイエス様もこのようなことを実際に言ったかもしれないと思っています。今日の1節を見てみますと、「イエスはこの群衆を見て、山に登られた」とあります。そして「幸い」について教え始められたわけです。「この群衆」が一体誰のことだったのかは、前の節に書いてあります。4：24からお読みします。「そこで、イエスの評判がシリア中に広まった。人々がイエスのところへ、いろいろな病気や苦しみに悩む者、悪霊に取り付かれた者、てんかんの者、中風の者など、あらゆる病人を連れてきたので、これらの人々をいやされた。こうして、ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ、ヨルダン川の向こう側から、大勢の群衆が来てイエスに従った」。この時代には病気の原因は悪霊または汚れた霊の仕業、または本人や先祖の犯した罪のせいであると考えられていました。そのためにこれらの病人たちは、罪人だ、汚れているなどの理由で差別され、共同体からも隔離されたりしていました。私たちだって、周りから「お前は罪人だ」や「お前は汚れている」という否定的なレッテルを張られて「我らに近寄るな」と社会から切り捨てられるうちに、自分自身でも「自分は罪人なのだ」「どうせ私は汚れた者だ」「私は必要のない人間だ」などと、自分を肯定する力も失ってしまうのではないでしょうか。彼らも周りから不当に裁かれ抑圧されるうちに、人間不信や猜疑心、嫉妬心やいじけた気持ちなどで心を貧しくさせられていたのかもしれません。しかしそんな彼らが、イエスの評判を聞いてガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ、ヨルダン川の向こう側から続々とイエスの元にやってきたのです。彼らはきっと、不当な抑圧による自己否定や人間不信・他者への敵意の中にありつつも、そんな自分を脱ぎ捨てて喜んで生かされたいという願いを捨てていなかったのです。そしてイエスは、そんな痛みと願いを携えて集まってくる人たちを見て山に登り、「幸い」について教え始められたのです。

つまり、イエス様の言われた「幸いな者」すなわち「心の貧しい者」は、自分の心

の貧しさに心を痛めている人・自分の心の貧しいことを知っている人、そしてその心の貧しさからの解放を願っている人のことだったのではないでしょうか。些細なことで家族に怒鳴り散らす自分勝手な自分。人をうらやみ、自分が不幸なのはあいつらのせいだと自分を正当化し、責任を周りに押し付けながら生きる自分。ねたんでいた他人が不幸に襲われることでほくそえむ浅ましい自分。人を蹴落として少しでも優越感を感じたいと願っている卑怯な自分。諦めと恨みの気持ちで内にこもってしまういじけた自分。そんな、自分でも認めたくない醜い一面が自分にも確かにあるということを痛みと悲しみをもって認め、そこから解放されたいと願っているこの私に向けて、キリストは「天の国はそんなあなたのためのものなのだ」と言われるのです。

そしてここで続けて挙げられている「幸いな人々」も、いずれもそのような心の貧しさを自分がもっていることを認め、そこからの解放を願っている人々のことなのではないでしょうか。「悲しむ人々」は、なぜ悲しんでいるのか。その悲しみの理由は様々でしょう。それは、自分の心の貧しさが直接的あるいは間接的に関係していたり、心が貧しくさせられるほどに痛めつけられたことによるのかもしれません。「柔和な人々」「憐れみ深い人々」「心の清い人々」が柔和で憐れみ深く、心が清くあれるのは、彼らが自分の心が貧しいことに痛みをもっているからかもしれません。「義に飢え乾く人々」や「平和を実現する人々」「義のために迫害されている人々」とは、こんな自分にも心の貧しい面があり、そんな自分が偉そうに正義や公正を云々することはできないということをわきまえつつも、それでも座ってはおれずにもがいている人なのかもしれません。

このように、「心の貧しい人々」とは、同時に慰められることなく悲しむ人々でもあり、いたわりの大切さを良く知っているがゆえに柔和で憐れみ深い人々でもあり、義に飢え渇く人々であり、心の清い人々でもあり、平和を実現し、そして義のために迫害される人々でもあるのです。そしてそんな「心の貧しい人々」にこそ、イエス・キリストは「幸いである」「天の国はその人たちのものである」と宣言して下さる。自分の心の貧しさに痛みを感じつつもがくそんな「心の貧しい人々」にこそ、キリストは「喜びなさい。大いに喜びなさい。」と励まして下さる。私たちも、それぞれ必ず何らかの痛みを抱えているはずです。その痛みのゆえに救いと解放を祈り求める心の貧しさというものを、私たちは大事にしていきたい、自分の心の貧しさを謙虚に引き受けて神様の助けを願い求め、神様に天国に迎え入れていただける者となっていきたい、そう思っています。

みなさんも一度、「脳内メーカー」やってみてください。